

図の上部には、次の文がある。

〔釣船の三婦〕

■ 中村芝十郎

▲「いや」三ぶさんむりに頼れとふていうでハなひがわたしが

〔其〕人あづかれバおまへの男が立ぬハどうしてたどし女で

〔まさ〕かの時やくに立ぬと見すへてかまんざらひぢり

〔かすりを〕くうやうなアイ女子でもムんせぬ一ったんたのむ

たのまれたのというたからハ三日なりともあづからねバ

わたしも女が立やんせぬ立て下んせおやじさん

■「いや」ごつもあづけては此三ぶが男がたゝぬ▲「サアその

立ぬわけ聞ませふいかさまそれにハやうすが

あるそりやママどをして立ませぬ■「ホゝたゝぬ

といふわけハないぎのかほにいろけがある

ゆへ徳兵衛が思ふにも三ぶといふ者はよい

年をしてぶ多んりよな身に火がつい

たがせつなきにわかい女房に若ひ男

を預けてやつたはきこへぬと思ひハせまい

が又思ふまい物でもないあながちこなた

にかぎつてそふした事ハあるまいけれど

ぶんべつの外といふ事があるによつて又うた

がふまい物でもないが甘ない事ぢや／＼ない事ぢやに

よつてけつく戸が立られぬはら立まいぞや／＼

いつそこなたのかほがいがんであるか半ぶんかけても

あつたら徳兵衛もなんとも思ふまい又世間も済む。俺や誓文コレ此珠数にかけ預けたい／＼。

此方の根性を見据多たによつて。が万々が一徳兵衛が立たぬ事が出来ると。俺は勿論九郎兵衛

までが。男がすたるといふ事はあるまいけれど外と

徳兵衛女房おたつ

▲ 岩井桑三郎

〔い〕字であづけにくひまあそふ思ふて下されと

事を分たる「い」んにつれそふ女房も

理にふくしお辰ハもとより詞も出ず

さしうつむいて居たりしが何思ひけん

たちなを ひばち  
立直り火鉢にかけてつきうの火に

なつたのを追取て我とわが手に我かほへ

べつたり当る焼かねにこ何ゆゑと

夫婦はあはて薬よ

水よといたはれば

正氣付しか

むつくと

起

▲ ♪ なんと三ぶさん

此かほてもふん

べつの外と

いふ字のいろけが

あらふか ■ ♪ できたおないぎ

礮の丞どのの事をしつかりと

〔頼みます〕 ♪ スリヤあづけて〔以下破損解読不可能〕